

# 「インド洋のグルニエ」 マダガスカル



三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング  
政策研究事業本部 国際研究室  
主任研究員 志邨 建介

「グルニエ (Grenier)」という言葉は「屋根裏部屋」を意味するフランス語である。いったい、「インド洋の屋根裏部屋」とは何のことかと思われるだろうが、これはインド洋 5 カ国・地域で構成するインド洋委員会 (Commission de l'Océan Indien : COI)<sup>1</sup> が 2016 年に採択した地域食料安全保障プログラムの中で、メンバーであるマダガスカルに与えた一種のキャッチフレーズである。

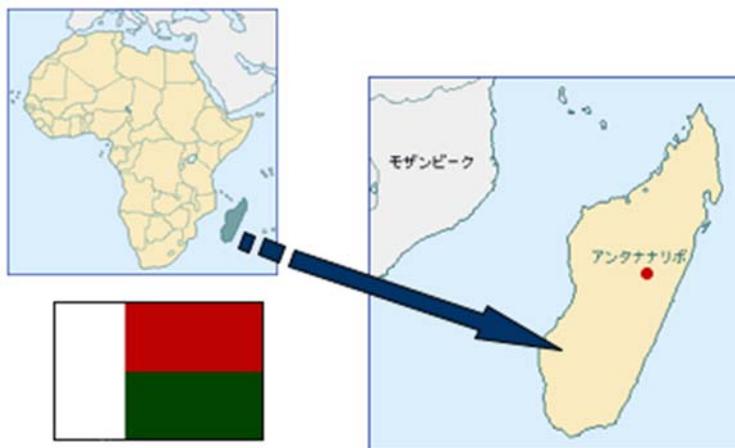
筆者は JICA (国際協力機構) の調査ミッションの一員として、2017~2018 年に何度かマダガスカルに渡航し、その産業開発ポテンシャルについて調査を行った。日本では「キツネザル」や「バオバブ」等、独特の生態系で有名なマダガスカルであるが、その社会・経済事情や産業状況はあまり知られていない。以下ではその一端を紹介しつつ、「屋根裏部屋」の意味するところをつまびらかにしてみたい。

## ● 概要と歴史

マダガスカル共和国はアフリカ大陸の南東 400 キロ沖に位置する人口 2,557 万人の島国で、その広さは約 59 万平方キロ、日本の約 1.6 倍に及び、世界で 4 番目に大きな島である<sup>2</sup>。民族は 4~6 世紀に現在のインドネシアから移住してきたと見られるマレー系、11 世紀頃にアフリカ大陸から渡ってきたアフリカ系の他、アラブ系、インド系等 18 民族で構成され、宗教は太宗を占めるキリスト教と伝統宗教の他、イスラム教徒も存在する。

18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてマレー系のメリナ人によって国が統一されたが (メリナ王国)、1896 年にはフランスの植民地となり、1960 年にマダガスカル共和国として独立した。1970 年代後半から 90 年代初頭にかけて社会主義を採用する一方、2000 年代にはビジネス界出身の大統領が外国投資誘致に力を入れる等、体制が大きく変化した。政権交代の都度、社会的な混乱を伴って経済が停滞するという歴史のため、内戦を経験しなかったにも関わらず、マダガスカルは一人当たり GDP が 450 ドル (2017 年世銀データ)

マダガスカル位置図



出所：外務省

<sup>1</sup> 1982 年設立。構成メンバーはマダガスカル、モーリシャス、コモロ、セイシェル、および仏領レユニオン。

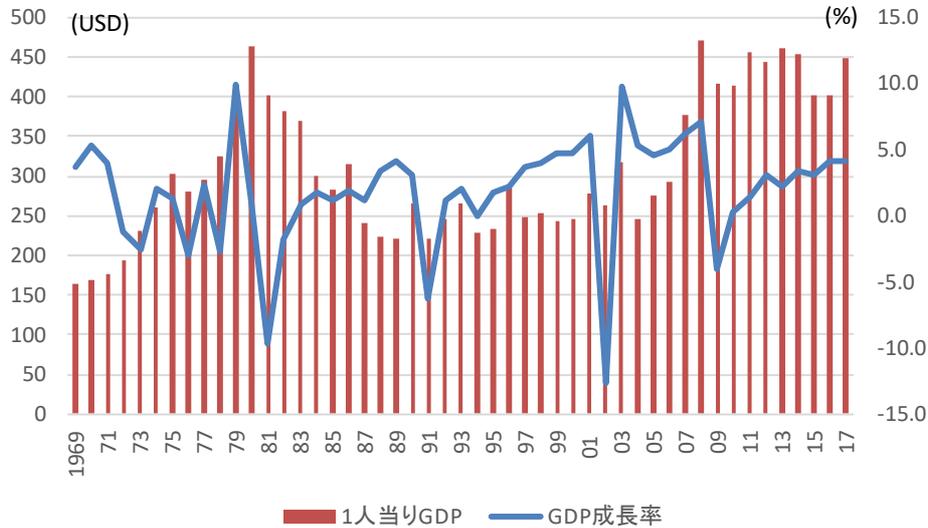
<sup>2</sup> 外務省「国・地域」情報、駐日マダガスカル大使館ウェブサイトによる。人口は 2017 年世銀データ。



## 「インド洋のグルニエ」マダガスカル

という最貧国である。世界で同様あるいはそれ以下の経済水準にあるのは、コンゴ民主共和国、モザンビーク、中央アフリカ、ニジェール、マラウイ、ブルンジ等数カ国に過ぎない。

### マダガスカルの GDP 成長率と 1 人当り GDP の推移



出所：World Bank, World Development Indicators より作成。

## ● 喧噪と活気に満ちた首都アンタナナリボ

マダガスカルの首都アンタナナリボに入って感じた印象は、他のアフリカ諸国の都市とは異なるものだった。第一に、街を行き交う人々の中に、明らかにアジア系と見られる人々が多く含まれている。筆者が現地滞在中にしばしば昼食を食べに通った役所の簡易食堂には、ほとんど日本人の職員さんを見紛う常連客がいて、奇妙な感覚に陥ったものである。第二に、人が多い。「世界都市圏別・人口密度ランキング BEST25 (2018 年)」<sup>3</sup>によると、アンタナナリボの都市圏人口密度は 13,800 人/km<sup>2</sup> (都市圏人口 268 万人) で、第 23 位である。この数字に近いところでは、コートジボワールのアビジャン (25 位、13,700 人/km<sup>2</sup>) やネパールのカトマンズ (21 位、14,900 人/km<sup>2</sup>) 等があり、もう少し多いところでカメルーンのヤウンデ (18 位、15,300 人/km<sup>2</sup>) とドゥアラ (15 位、16,200 人/km<sup>2</sup>) がある。ちなみに 1 位はバングラデシュのダッカ (47,400 人/km<sup>2</sup>) となっている。このデータで見る限り、アンタナナリボの人口密度は、アビジャンやヤウンデ等、西アフリカの都市並みと言えるが、両都市を訪れたこともある筆者の実感としては、むしろダッカに近い。それほどに、街に人と活気が溢れている。

この人の多さに加えて街の喧噪に拍車をかけているのが、おびただしい数の古い自動車の存在である。現在、世界中を見渡し

### アンタナナリボ市内の雑踏



<sup>3</sup> <https://worldscities.net/2018/04/15/%E4%B8%96%E7%95%8C%E9%83%BD%E5%B8%82%E4%BA%BA%E5%8F%A3%E5%AF%86%E5%BA%A6%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%AD%E3%83%B3%E3%82%B0best25%E5%BC%882018%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E5%BC%89/>



## 「インド洋のグルニエ」マダガスカル

でも好事家しか乗っていないであろうシトロエン 2CV (1990 年生産終了) がタクシーとして走っている。タクシーの主力車種はルノー4 (1992 年生産終了) だ。当然、現在の自動車のような排気ガス対策は施されていないから、標高 1,200 メートルに位置するアンタナナリボの大気汚染はひどい状況にある。

### ● マダガスカルの産業・農業事情

マダガスカルの大まかな産業別 GDP 構成比は農林漁業 22%、産業 28%、サービス業 50%であるが (2018 年世銀データ)、実質的な主要産業は農畜産業、鉱業、商業および観光業である。この中で、特に農業についてみてゆこう。

農業生産の中心は主食であるコメだ。一人当たりのコメの消費量は 1 日 283 グラムと日本の 2.4 倍 (2016 年 FAO データ)、国内消費量の概ね 95%を自給している。水田風景は日本やアジアのそれとよく似ている。しかし生産性は低く、農村の貧困率は 80%以上に達する。このため、日本 (JICA) の技術支援により生産性向上や灌漑施設の改修に取り組んでいる。

アンタナナリボ郊外の水田風景



マダガスカルの農産品で日本にも馴染みがあるのは香辛料だろう。マダガスカル最大の輸出品目であるバニラは世界生産の 8 割を占め、クローブはインドネシアに次ぐ世界第 2 位の生産国である。バニラは先進国市場での需要拡大を背景に価格が高騰しており、日本もその 9 割以上をマダガスカルからの輸入に頼っている。クローブは食品用の他、外国企業による香料用クローブオイルの生産も行われている。香料と言えば、「シャネル 5 番」の原料であるイランイランについても、マダガスカルは隣国コモロに次ぐ生産国である。しかしいずれの生産も組織化されず伝統的な方法で行われており、近代的なサプライチェーンからはほど遠い状況にある。高値で売買されるバニラについては、生産農家を狙った犯罪も多発している。

ところで、マダガスカルの農業に関して、数年前に日本でも報道された出来事があった。2008 年 12 月に、韓国企業の大宇が、マダガスカル政府から同国農地の半分に相当する 130 万ヘクタールの農地を 99 年間無料で貸借する契約を締結したと報じられた事件である。実態は、大宇とマダガスカル政府の間で土地の踏査を目的とした覚書が締結されたのみとのことだったが、国内からの政府批判が高まり、政変へと繋がる政争激化の一因となった<sup>4</sup>。

現在、マダガスカル政府は、国際的にも競争力の高い香辛料を梃子に、野菜や果物、畜産等を含めた農業分野への大規模な投資誘致を計画しており、特に有機農業を有力なターゲットと位置づけている。ただし、上の経験を踏まえて、外国資本の土地取得については、法律上可能としているものの、慎重に実施してゆく模様である。また、世銀や国際農業開発基金 (IFAD) 等の国際機関もマダガスカルの農業開発、農業投資促進、農業バリューチェーン開発に向けたさまざまな取り組みを行っており、この国の農業が持つポテンシャルの実現が大いに期待されている。

<sup>4</sup> 外務省「わかる！国際情勢 農地争奪と食料安全保障」2009 年 8 月  
(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol44/>)



### ● 「世界のグルニエ」となり得るか

さて、冒頭で紹介した「インド洋のグルニエ（屋根裏部屋）」とは、COI がマダガスカルの農業ポテンシャルに着目し、同国の農産物供給力を強化・拡大することで、COI 諸国全体の食料安全事情を改善することを狙いとするプロジェクトの題目に掲げたフレーズである<sup>5</sup>。したがって、ここで言う「屋根裏部屋」とは、「食料を貯蔵しておく部屋、食料貯蔵庫」といった意味合いで用いられていると考えられるだろう。

従来、マダガスカルの主要な輸出先は EU（特にフランス）、米国、中国等である。これに、近年マダガスカル第二の輸出産品となったニッケルの主な輸出先である日本と韓国が加わった。これは日本の住友商事が韓国・カナダ企業と合弁で実施する大規模ニッケル・コバルト鉱山開発事業（アンバトビー・プロジェクト）の本格稼働によるものである。マダガスカルの輸出市場としては、これらの諸国・地域に加えて、COI 諸国を始めとするインド洋沿岸全体、また、東アフリカ地域に拡大することが期待されている。そうすると、マダガスカルは、インド洋のみならず「世界の屋根裏部屋」と称されるかもしれない。

もちろん課題は山積している。供給力強化のボトルネックとなっている貧弱なインフラと政治的不安定性、政府のガバナンスに加えて、森林を始めとする環境破壊も深刻である。しかし、環境保全に関しては、上述の「アンバトビー・プロジェクト」が注目すべき取り組みを行っている。産業インフラの整備や事業活動を生物多様性や環境保全に関する国際基準にのっとり実施し、併せて地域住民の環境保全に対する意識を喚起しようとするものである<sup>6</sup>。

例えばこうした取り組みを契機として、マダガスカルが環境や生態系に配慮した独自の産業発展戦略を追求するなら、「世界の屋根裏部屋」となることも不可能ではない。いや、むしろそれこそが最貧国マダガスカルが発展しうる唯一の道と考えるがいかがだろうか。

東部地域（トアマシナ）の運河と森林



（写真はすべて筆者撮影）

#### <筆者略歴>

1990 年、(株)三和総合研究所（現三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング）入社。アジア、アフリカ地域を中心とする政府開発援助（ODA）プロジェクトに多数従事するとともに、産業政策、通商政策、農業政策等に関する海外政策・制度調査を幅広く実施。近年は西アフリカ・南部アフリカ地域やミャンマーにおける産業開発ポテンシャルに関する調査を集中的に行う他、西バルカン地域における調査を実施している。2017 年より順天堂大学国際教養学部非常勤講師を兼任（食料問題担当）。

<sup>5</sup> COI, "Madagascar, Grenier de l'Océan Indien - Note conceptuelle sur le projet régional de sécurité alimentaire - Stratégie régionale de sécurité alimentaire : promotion de la production agricole à Madagascar", 2014.

<sup>6</sup> 例えば次のような記事を参照。 [http://www.madacom.org/conference/summary/conf17\\_06.html](http://www.madacom.org/conference/summary/conf17_06.html)